

復活 10 周年！ 白石市消防団伝統階子乗り  
震災復興を願い「鶴亀」の演技を披露！



命懸けで演技する乗り手と全身の力で支える支え手。  
支え手は乗り手の心意気を受け止め階子を支える。



「ほっぴ」と法被は消防の心意気。その姿には「伝統を受け継いでいく」という誇りが感じられる。



乗り手と支え手が一体となって演じる 豪快かつ繊細な技

階子を固定せず命綱を付けない階子乗りは、県内で仙台市と白石市のみ。

万が一の場合は、支え手が背中ではり手を受け止める。支え手と乗り手の「絆」があるからこそ、乗り手は全身で心意気を表すことができる。

平成13年6月、伝統文化の継承と消防団を身近に感じてもらうと、大正時代の記録が残る階子乗りを復活させるため「白石市消防団伝統階子乗り隊」が正式に発足した。階子乗りの手順や演技は、江戸、金沢と並び「三大火消」のひとつとして高い技術を誇る仙台消防階子乗りの流れを汲む。当時の仙台消防階子乗り保存会の参与故佐々木芳一先生の指導を受け、6カ月という短期間で昼夜を問わず練習を重ね、平成13年12月、10周年式典と同じ白石城の下で、「白石市消防団伝統階子乗り」が80年振りに復活した。

80年の時を経て復活した階子乗りから10年。佐々木先生の意思を継いだ教え子たちや郷土を愛する市民の皆さんの手によって受け継がれた伝統は、さらに磨きを掛けながら、これからも「白石」という大地に根を張り、たくさんの人たちの心に大きな花を咲かせ続けていく。

80年振りに復活した階子乗りから10年。伝統を守り続ける

階子を降りたら「ありがとうございまして」と感謝する。支え手と乗り手の「絆」、あうんの呼吸は、心をひとつにしてはじめて成り立っている。

支え手が大地に根を張り、乗り手が花を咲かせる

10月1日、「白石市消防団伝統階子乗り復活10周年記念式典」が白石城芝生広場で開催された。

階子乗りを披露したのは、白石市消防団(跡部敏団長)に所属する約50人の団員たち。町火消しの心意気を示す木遣り唄とともに、消防団の纏(※)を天高く突き上げながら行進。晴天の中、高さ8メートルの階子の上で、それぞれ「遠見」「肝返し」「鯰」などの大技を見せた。最後は、2基の階子にそれぞれ2人の乗り手が一緒に「鶴亀」を決め、震災復興を願う「がんばろう宮城」の垂れ幕が下り纏が大きく振り上げられると、観客から大きな拍手が送られた。

「支え手がしっかりと大地に根を張り、階子の枝を勢いよく伸ばし、乗り手が花を咲かせ、纏や提灯が実を添える」。これが仙台消防階子乗りの流れを汲む白石市消防団伝統階子乗り。階子の上で華麗な演技を見せる乗り手に目がいくが、階子乗りで大事なものは階子を支える男たち。乗り手の命を預かっているからこそ絶対に気を抜けない。乗り手は、階子に登るときに「お願いします」と声をかけ、

※纏 消防団の旗印として用いられている。「火消しの魂」であり「心意気」を表すものでもある。